

人生の転職

山根美知は最近悩んでいた。大学を卒業して、この会社に就職して、もう六年近くたつ。入社したときは、一応、総合職という触れ込みだったが、実際には、お茶くみの女の子と同じ待遇だった。重要な仕事は決して回ってこない。女は、結婚して辞めていくものというのが、この会社の常識であった。同期の男子では、すでに主任に昇格するものもいる。

美知がある日、お茶の準備で給湯室に居たときのことである。廊下から、こんな会話が聞こえてきた。

「年寄り連中、いつまで居座るつもりなのかな」

「正直、迷惑だよ」

美知はいやな気がした。きっと、美知と、一年先輩の和代のことを言っているのに違いない。

「本来なら、若いひとが入ってくるはずなのに、上がつかえているからどうしようもないんだ」

「どっか他の部署に移動になってくれないかな」

「だめだよ。どこの課だって引き取りたくないだろう」

美知は頭にきて、お茶の準備をやめた。

「男どもは勝手なんだから」

本来、美知がお茶の準備をする義務はないのだ。美知は、そそくさと自分の席に戻った。

すると、課長が

「みっちゃん、お茶はどうしたの」

とのんびりした声で聞いてくる。美知が無視していると、先輩の和代が心配顔でやってきた。

「美知、どうしたの、今日はあなたがお茶の当番の日でしょ」

「先輩、わたし頭にきました。もうお茶はやりません」

「いったい、どうしたの？あなたらしくないわね」

和代は、美知よりも一歳上だが、商業高校を卒業してすぐに入社したので、美知よりも五年も長く会社にいる。仕事にも、よく精通していて、実は、この課は和代で持っているようなものなのだ。男どもも偉そうなことを言っているが、いざとなると和代のところに聞きにくる。

美知は、自分がけなされたことよりも、和代を馬鹿にしたことが許せなかったのだ。

和代に事情を説明すると、一瞬驚いたような顔をしていたが

「なんだ、そんなこと」

と一笑に付した。

「でも、少しこらしめてやるか」

そう言うと、課長席に行って、一言二言つぶやいた。課長は、すこし困ったような顔をしていたが、分かりましたというように頷いた。

和代は戻ってくると

「話はついたわ。もう、私たち、お茶くみはしなくていいことになったから」
と言う。いったい、どんな魔法を使ったのだろうと美知は不思議に思った。

和代は

「あっそうだ。今夜開いてるかしら。ちょっと、食事をしながら、相談したいことがあるんだけど」

と聞いてきた。

「今夜なら大丈夫です」

「そう。じゃ、仕事が終わったら、一緒に例の店に行こう」

例の店とは、最近、できたしゃれた居酒屋である。女性ひとりで入ってもおかしくない店で、何よりも完全禁煙というのを美知は気に入っていた。料理も最高で、値段もけっして高くなかった。

店に入ると、いつもの席に通された。となりのブースとの間にある暖簾を下げると、個室風になる。

和代は店員に

「おまかせコースをお願いします。それから、生ビールをふたつ」

と注文した。

「先輩、いったいなんですか、急にあらたまって」

「実は、今度、会社を辞めようかと思っているの」

「えっ何ですって。どうしちゃったんですか？」

「ある人から求婚されて、それをお受けしようと思うの」

「結婚ですか！」

美知は少し驚いた。和代は仕事に生きがいを感じているように見えたからだ。時間があるときは、よく美知を誘ってくれる。とてもつきあっているひとがいるようには見えなかった。

「そうなの。かなり悩んだんだけど。今日の美知の話で決心したわ」

「どういうことですか？」

「自分は、この課にはなくてはならない存在という自負があったの。だから、仕事を辞めることに抵抗があった。でも、今日で、それも自分の買いかぶりということがよく分かった。自分で思うほど、まわりは、自分のことを買ってい

ないのよね」

美知が頭に來たのは、そのことだった。いつもは頼りにしているくせに、陰ではあんな話をしている。

「それで、返事はもうされたんですか？」

「ええ。ここに来る前に承諾してきたわ」

「いったい、誰なんですか。先輩にプロポーズしたひとって」

「商品開発部の斎賀部長。知っている？」

「知っているも何もないですよ。当社のホープじゃないですか。将来の社長候補ですよ」

「そう評価するひとも居るわね」

「でも、斎賀部長はどうして先輩にプロポーズしたんですか」

「美知には黙っていたんだけど、実は、斎賀さんは、わたしが入社したときの上司だったの。まだ、三十そこそこで、まさに仕事の鬼という感じだったわ。高卒のわたしにも結構きびしくて、腰掛けのつもりなら、すぐに辞めろって言われた」

「えっそうなんですか。でも、斎賀部長って、とてもやさしいという評判ですよ」

「実はね。仕事人間が災いして、奥さんから三行半をつきつけられたの。奥さんは、良家のお嬢様で、見合い結婚だったらしい。ところが、結婚したら、甘い生活どころか、平日はいつも午前様、土日も出社という夫に嫌気がさしたらしいの。そして離婚を契機に、斎賀さんの仕事一辺倒という生活も変わったらしいわ」

「そうだったんですか」

「でも、仕事人間で、厳しかったけど、わたしは、とてもいい人と思ったわ。理不尽なことはしなかったし、仕事にしっかりした芯が一本通っていたの。なによりも、女だからといって差別するようなことはしなかった。いい仕事をすれば評価もしてくれたの」

いまの課にいる連中とは大違いだと美知は思った。

「それが、どうして先輩と、こういう関係になったんですか」

「わたしが入社して四年ほどして、斎賀さんは別の課に移動になったの。三十歳そこそこで課長になるという大抜擢よ」

「すごいですね」

美知は素直に関心した。普通であれば、課長になるのは四十近くだ。よほど上層部の評価が高かったのであろう。

「それでね。斎賀さんの栄転を祝して、課で送別会を開くことになったの」

その会で、別の女子社員が慣れない酒を飲まされて具合が悪くなった。和代が

介抱して、彼女の家まで送っていくことになったのだが、斎賀が心配して、最後は、タクシーで和代の家まで送ってくれたのだ。

それから、しばらくして斎賀から電話があったという。週末にあってくれないかという誘いであった。和代は、てっきり仕事の話と思ってでかけたが、斎賀が連れて行ってくれたのは、おしゃれなフレンチレストランであった。食事は、とてもおいしく、ワインも最高だった。和代にとっては、生まれてはじめてのぜいたくであったという。

食事での会話は、仕事に関するものもあったが、多くはプライベートな話であった。斎賀の夢はスキーマのプロになることだったという話を聞いて、和代は本当に驚いた。斎賀は仕事しか眼中にないと思っていたからだ。

でも、この食事はいったい何のための食事なのだろうと和代はいぶかった。いままでの労に対する感謝の気持ちだったのだろうか。斎賀は、帰りは和代を自宅までタクシーで送り届けてくれた。

それから、月に一度ほど斎賀は和代を食事に誘った。そのたびに和代は感動した。仕事人間と思われている斎賀が、実にしゃれたレストランを知っていたからだ。しかも、会話の内容も豊富で、斎賀が仕事だけではなく、いろいろな分野に精通していることが分かった。

しばらくして、和代は

「これはもしかしたらデートなのだから？」

と考えるようになった。斎賀は、あくまでも尊敬すべき上司であったし、なによりも、斎賀のような立派なひとが、自分を恋愛対象に選ぶはずがないという思いが強かった。

しかし、月に一度とはいえ、食事に誘ってくれるということは、単なる仕事上の関係とも思えない。それでも、和代には、そのことを斎賀に問いただすことはできなかった。

このような奇妙なデートが続いて二年ほどがたったある日に、いつものように食事に出かけると、斎賀が突然あらたまってこう切り出した。

「和ちゃん、ぼくと結婚してくれないか？」

和代は、本当にびっくりした。斎賀からプロポーズされるとは夢にも思っていなかったからだ。和代は思わず

「わたしでいいんですか？」

と聞いていた。斎賀は

「なにを言っているんだ。僕の気持ちは真剣だよ」

と言ってきた。和代は、本当に驚いた。それでも、プロポーズは承諾しなかった。和代も、仕事で頼られるようになっていた。いまの生活を急に変えることはできない。それに、斎賀と結婚したら、会社は辞めなければならない。和代

も斎賀のことは決して嫌いではなかった。斎賀が、自分を結婚相手として真剣に考えていると知って、とても嬉しかった。

その替り、それからは、レストランでのデートは止めて、週末に斎賀の自宅に通うようになった。斎賀は会社の近くに 3LDK のマンションを購入して住んでいた。斎賀は、整理整頓はしっかりしている方ではあったが、男の一人住まいということもあって、和代から見ると掃除は行き届いていなかった。和代は、斎賀のマンションに週末に通い、そうじをして食事の準備をした。

斎賀は、和代の料理を歓迎した。和代は、料理が得意で、レストランに使うお金でぜいたくな食材を使って、豪華な料理をふるまった。そんな半同棲生活は最近まで続いたが、突然、転機が訪れた。

斎賀が、米国にある支社の支社長となることが決まったのである。米国に行けば、すくなくとも五年は向こうで過ごさなければならない。斎賀は、どうしても和代と一緒に連れていきたいと言ってきた。

和代は迷った。斎賀のことは決して嫌いではない。いや、むしろ、斎賀なしの生活は考えられない。しかし、会社の仕事も重要と思うようになっていた。特に、いまの課は和代でもっているようなものである。しかし、それも和代の思い過ごしということが、今日の美知の話で分かった。それが、和代を後押ししたことになる。

「なんだ、先輩水臭いじゃないですか。どうして、斎賀部長とのことを内緒にしていたんですか」

美知は、少し癪にさわった。

「ひとに進んで話すものではないでしょう。それに、社内恋愛はあまり歓迎されないのよ」

確かに、そんな雰囲気はある。ばれたら、必ず結婚しなければならないという古い体質のある会社だった。

和代は、会社帰りに、美知と結構食事に出かけていたので、つきあっている相手はいないと思っていたが、週末までは気が回らなかった。斎賀が相手であれば、ウィークデイのデートは無理である。

「先輩、本当におめでとうございます。自分のことのようにうれしいです」と言って、ふたりで乾杯した。

「でも、先輩がいなくなるとさびしいな。わたしは、先輩と違って、仕事も頼りにされていないから、ますます、居づらくなります」

すると、和代は意外なことを切り出した。

「実はね。私も転職を少し考えていたの」

和代もいずれは、斎賀との結婚を考えていたらしい。しかし、結婚したら、いまの会社の仕事は続けられない。いまのプロジェクトが一段落したら、斎賀と

の結婚を考えよう。そう思っていたようなのだ。

そんな時、英会話学校の友人から、ある仕事をやってみないかと誘われたという。和代は、斎賀の米国行きを予測していたわけではないが、英会話学校に通っていた。いまでは、英検一級と TOEIC800 点を取得している。

「美知は、英会話はできたわよね」

「ええ、すこしは自信があります」

美知は、大学時代は英文科に所属し、一年の海外留学も経験していた。実は、その経歴が買われて、いまの会社に入社したのだが、仕事にその経験を生かすことはできなかった。これからはチャンスはないであろう。

「そのひとは、大学の事務で働いているの。美知も聞いたことがあるでしょ 黎明学園大学って。そこで秘書みたいな仕事をしているんですって。その彼女が、今度、留学することが決まったらしいの。それで、後任を探しているんですって。美知、挑戦してみない」

「大学ですか？」

「ええ、国際政治学科という学科で、この大学では比較的新しい学科なんですって。結構、海外からの来客も多いし、海外の研究機関ともやりとりがあるので、英語のできるひとが欲しいらしいの」

意外な展開に少し、美知はとまどった。こんな話が出るとは思ってもいなかったのだ。

「美知なら、わたしも安心して推薦できる。実は、その話考えてみると、彼女に言ってしまったら、かなり期待していたみたいなの。それから、収入のことだけど、ここよりは少しいそうよ」

美知は、英語が活かせる職場と聞いて、興味が沸いた。しかし、転職となると一生の大事である。即答はできないので、少し考えて欲しいと伝えた。

転職

和代と斎賀が結婚するという話はいっきに会社中に広まった。重役たちの間では、浅野和代さんを選ぶとは、斎賀も目が高いと、ますます斎賀の評価が高まっているという。

美知はうれしかった。やはり和代は評価されていたのだ。課の連中も和代におめでとうを言いに来た。もしかしたら、将来の社長夫人である。あだやおろそかにはできないということであろう。

「ホントに現金な連中だわ」

いまからゴマすりしている。

その様子を見て、美知も決心した。こんな会社に居ても、自分の将来はない。この際、転職してみようと。

決意を和代に知らせると、おおいに喜んでくれた。とは言っても、先方の都合もある。いくら美知がよいと言っても、大学側の意向もある。和代を通して、履歴書を先方に渡した。一応、課長には、転職の可能性を伝えていた。

課長は

「和ちゃんに、みっちゃんと美人がふたりも我が課から抜けるなんてさびしいね」

と歯の浮くようなせりふを吐いた。先輩は確かに美人だけど、自分はそんな自信はない。本音では

「年寄り早く辞めて行って欲しい」

と思っているくせに、と美知は少し不愉快になった。

それからしばらくして、大学から返答があった。ぜひ採用したいが、一応面接に来て欲しいという。美知は、当然のことと思い、面接に出かけた。てっきり、大学に行くのかと思ったが、面接会場は、大学に隣接した貸しビルであった。

「いや、よくおいでいただきました」

面接会場にはネクタイを締めた幹部がいるのかと思ったが、ノーネクタイの五十歳代の男性がひとりだけだった。

名刺を手渡された。そこには

「黎明学園大学人材派遣センター 人材派遣課長 谷良治」

と書かれていた。谷の説明によると、この大学の事務系の職員の多くは、黎明学園大学として雇用するのではなく、その子会社の人材派遣センターが雇用して、派遣する仕組みをとっているという。大学も人件費を減らすために、いったん別会社で雇用して派遣するという手をとっているのであろうか。

谷は、職場を見て欲しいと言って、美知を大学に連れて行った。国際政治学科は、最近、建てられた新しいビルに入っていた。学科の事務室は、図書の閲覧コーナーや、応接セットなどがあり、かなりスペースは広い。受付の奥に、女性がひとり座ってコンピュータに向かっていた。谷は

「こちらが、例の山根美知さんです」

とブースの中の女性に紹介した。

「ああ、浅野さんの紹介の方ですね。私は、宮下由美と申します。よろしくお願ひします」

と女性は答えた。歳は、たぶん美知と同じぐらいであろうか。とても、清楚な女性であった。谷はこう話した。

「実は、宮下さんはこの学科の先生たちから全幅の信頼を寄せられていまして、彼女が辞めたいと言っているということをもらしたら、先生全員から、私がつきあげを食らってしまいました」

宮下は

「谷さん、そんな買いかぶらないで下さい。そんなことは決してありません。ただ、先生たちの言うことを素直に聞いているだけのことです」

「それが、大事なんですよ。前任者は、先生たちをあごで使っているといって、とっても不評でしたからね」

宮下は意味深な笑いをした。

「宮下さん。それでは、申し訳ないですが、山根さんに、どのような仕事をすればよいのか説明していただけますか」

「分かりました。山根さんに断られたら、わたしのアメリカ留学が遅くなってしまうので、よく宣伝しておきます」

谷はよろしくと言って引き上げてしまった。

美知が驚いたことに、学科の事務室には宮下ひとりしかいなかった。人文社会学部としての大きな事務室があり、一般的な事務はそちらでこなすらしい。学科事務は、学科に所属する先生方の業務の手伝いが主な仕事ということであった。例えば、先生が購入したい備品の注文や伝票の管理、出張等の手配、また、来客への対応が主な仕事という。さらに、学生の管理は学部の学生課が窓口らしいが、敷居が高いので、学科事務によく相談に来るという。

「若い学生さんと接触していると、わたしの気分まで若くなるの。留学にチャレンジしようと思ったのも、そのおかげよ」

と宮下は言った。

時間的な拘束はそれほど厳しくはないが、学科で土日に研究会などがある場合には、出勤を求められることもあるという。

美知は、宮下の説明で、だいたい仕事の中身は分かった。いまの会社でも、似たような雑用はやらされていたので、大体の事は分かっている。

美知は、宮下に仕事上注意する必要があることを聞いてみた。

「実は、山根さんは経験がないでしょうが、大学の先生は、一般の社会人とは常識がかなりかけ離れているひとが多いの。だから、最初は少しとまどうかもしれない。でも、根は悪くないひとばかりですから、少し注意してもらえれば大丈夫と思います」

美知は、自分の会社の男どものことを思い返した。結構、常識はずれなものが多い。それと比べてどうなのだろうか。

もし、美知が大学への転職を承諾したら、二週間ほど宮下が引き継ぎなどの業務を協力してくれるという。美知は、大学の先生は非常識という言葉が少し気になったが、転職を承諾することにした。

送別会

会社が和代と美知の送別会を開いてくれることになった。おそらく、会社の男連中は年増がふたりいっぺんに消えるので、喜んでいるだろう。美知は、会社の飲み会はできるだけ避けてきた。ほとんどの男はタバコを吸うので、飲み会は煙がもうもうとして不衛生このうえない。少し居るだけで、せっかくの洋服がいやなにおいで覆われてしまう。

本音としては、送別会にもあまり参加はしたくないのだが、将来の社長夫人の和代の顔をたてて、三十分ほど、顔を出すことにした。

会場は、会社の近くの和風居酒屋であった。送別会くらい、もうちょっとおしゃれな店にできないのだろうか。美知は憂鬱になった。というのも、美知は畳の席が苦手だった。まわりとの距離が近いうえ、ビールや日本酒を飲むように強要される。隣が喫煙者だと最悪だ。しかも、女はお酌をするのが当たり前と思っている連中だらけだ。体をさわられるのも当たり前だった。

美知は、意識して、ラフな格好にした。もちろん下は綿パンである。タイトなミニスカートにしたら、それこそ、男どものいやらしい視線の格好の餌食になる。

会が始まる五分前ぐらいに到着すると、すでに和代も到着していて、半分ほど席が埋まっている。美知は、和代の隣の上座に座らされた。和代は、長めのスカートで、盛装に近い格好をしていた。美知は、自分の格好があまりにもラフなので、少し後悔したが、どうせ辞める会社だから、そんな気を使う必要もないと思い直した。

すでに、何人かがタバコを吸っていた。いやなにおいが鼻につく。時間になると、幹事の西条が挨拶を始めた。

「皆様、本日はお忙しい中、浅野和代さんと、山根美知さんの送別会にお集まりいただきましてありがとうございます。おふたりは、わが課にとっては、なくてはならない存在であり、一度にふたりとも居なくなれるのは非常に残念でなりません。しかし、浅野和代さんは、わが社のホープと結婚されるとのこと、まことにめでたい限りです。また、山根美知さんは、しがない商売の世界から、大学という知的世界に華麗に転身なさるよし、こちら、まことにめでたい限りです。

われわれにとっては、残念ではありますが、おふたりの輝ける前途を祝して、まずは、乾杯をしたいと思います。まず、課長より、お二人への祝辞を頂戴してから、乾杯いたします。それでは、吉野課長お願い致します。」

美知は少しくんざりした。吉野はあいさつが下手で有名である。とりとめのないことをだらだらと話す。できれば、はやく帰りたいのに、あいさつが長引いたら、それだけ帰りが遅くなってしまう。

出席者は、吉野のあいさつなどに耳を傾けるものはあまりなく、中には、乾

杯の前にすでに酒に口をつけているものまでいる。吉野のあいさつを聞き流しながら、美知は、これからのことを考えていた。

大学時代の同級生の半分ぐらいは結婚していた。年賀状に、子供の写真を貼り付けてくるものもある。大学時代は、みんなキャリアウーマンを夢見ていたが、いざ結婚となると、仕事を続けていくことに大きな抵抗があるようだ。

しかも、子供が生まれたら大変である。相当の覚悟を決めていないと、仕事を続けるのは難しい。日本の政治家は、金には困っていないから、いかに子育てが大変かということを知らない。少子化が進むのも当たり前である。

自分は結婚するのだろうか。和代は、結婚して本当にしあわせなのだろうか。専業主婦になった同級生がぐちをこぼすのを聞いていると、結婚への夢も薄れてしまう。

「それでは、おふたりの前途を祝して乾杯したいと思います。乾杯！」

吉野の挨拶は十分ほど続き、ようやく乾杯になった。美知は、ビールに軽く口をつけるだけにした。酒は嫌いな方ではないが、このような場では、あまり呑みたくない。

「乾杯が終わりましたので、それでは、おふたりに挨拶をお願いしたいと思います」

和代は、そつのないあいさつをこなした。美知も、課の方たちはみないい方ばかりだったので、本当に楽しく過ごさせてもらった。これからも、社と皆様の発展をお祈りしているという判を押したような挨拶をして終えた。

美知も和代にならって、差し障りのない挨拶をした。できれば、はやくこの場から逃れたい。和代も同じ考えのはずだ。ふたりは、仕方なく参加者にお酌をして回った。すでに熱爛にしているものもいて、返杯を要求されたが、固く断った。

一周したので、一応義理は果たした。ふたりは、幹事に、そろそろおいとますると挨拶した。和代は、結婚の準備があるからと適当に早引けする理由をごまかしていた。美知は、その手伝いにいくと嘘をついた。

美知が和代と一緒に店の外に出ようとする後ろから声をかけられた。

「山根さん、ちょっと話があるんだけど。いいかな」

見ると、同期の吉永が立っている。美知と和代の悪口を言っていたひとりだ。最後に捨て台詞でも吐く気だろうか。

和代は、吉永の様子をみて

「じゃ、私は外で待っているわ」

と気をきかしてふたりを残した。美知には、そんな和代の配慮が迷惑であった。すぐに、この場を去りたい。

「吉永君、何の用かしら」

同期ということもあって、吉永とは何回か飲みに行ったことがある。後輩の女子社員から人気があるらしい。仕事もできると評判で、天狗になっているのかもしれない。

「山根さんが辞めると聞いてショックだった」

吉永は何を言いたいのだろう。美知をからかっているのか。早く課を去ってくれと言っていたではないか。

「でも、これで勇気が出た。僕と正式につきあってくれませんか」

美知は、吉永の言葉の意味が分からなかった。でも、すぐに気づいた。自分をからかっているのだと。

ふすまの後ろで会社の同僚たちが、ふたりの様子を探っている気配がする。後で、酒の肴にして大笑いするつもりなのだろう。そう言えば、忘年会で「どっきりカメラ」の余興があった。いまでも、たて看板を持った後輩が控えているに違いない。そして、美知が真剣に対応したら、大笑いする気なのだ。

ここで、美知はふと思った。逆に、こっちもからかってやろうと。みんなが期待したような答えをして、最後はぎゃふんと言わせてやるのだ。

美知は、いかにも嬉しそうという顔をして

「えっ、本当ですか。わたしも前から吉永君のことが気に入っていたの。ぜひおつきあいさせて下さい」

と、いかにもぶりっ子という口調で言った。ちょっと、やりすぎかなと思ったが、今日は最後だ。これくらいの芝居は許されるだろう。

ここで、吉永は「ひっかかったな。ばーか」とでも言って、どっきりカメラの余興に続くのだろう。そうしたら、美知は思いっきり吉永の顔をひっぱたくことができる。あとは、「あかんべー」をして帰ればいいのだ。

ところが、吉永の反応は違った。いきなり

「やったー」

と腕を上挙げて、本当に喜んでいる。

すると、ふすまが開いて若手社員がどっと出てきた。「どっきりカメラ」の看板はどこにもない。

それどころか

「先輩かっこいい！」

「先輩やりましたね」

「よかったー」

「俺は感激したぞう」

などと、吉永のまわりを囲んで、はやしたてている。

美知はあっけにとられてしまった。

「これはいったいなんなの」

すると、吉永は美知に向かってこう言った。顔はいたってまじめである。

「山根さん。本当にありがとう。きっと振られるだろうと思って、ずっとドキドキしていたんだ。でも、勇気を出して告白してよかった」

すると課長が顔を出した。

「よかったな、吉永。じゃ、ふたりの前途を祝して、乾杯しなそう」

そう言うと、美知を誘った。

ふと後ろをみると、和代が立っている。美知のほうをみて、ニコッと笑った。

「なーに、これ」

美知はいまさら、さっきの返答は冗談だったとは言えなくなった。

真相

美知は怒った顔をして和代を責めていた。

「先輩は知っていたんですか」

「吉永君が、美知にぞっこんということは知っていたわ」

美知は、山根が自分と和代の悪口を言っていると思っていたが、それは誤解であった。吉永は、部署にいる嘱託職員のことを言っていたのだ。役所から押し付けられたふたりで、気位ばかり高くて仕事はできない。しかし、役所からの仕事をとってくるためには会社で面倒をみるしかない。吉永は、それに怒っていたのだ。

「でもね、うちの会社は社内恋愛に厳しいでしょう。結婚したら、退職も求められるし、だから吉永君は遠慮していたらしいの」

実は、美知は吉永のことが嫌いではなかった。むしろ、好意を持っていたくらいである。ところが、その吉永が和代や美知のことを、じゃまもの扱いしていると思って、ショックを受けていたのだ。

「ところで吉永君とはどうなっているの」

「先日プロポーズされました」

「それはよかったじゃない」

美知も不思議な気持ちだった。吉永が、そんなに真剣に自分に好意をよせているとは思ってもよらなかったからだ。

「それで、どうするの、美知は」

「転職したばかりですし、結婚はもう少し先かと」

でも、美知は吉永と結婚することを決めていた。思えば、転職が人生の本当の転機となった。